

昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽： コロムビア・ビクターを例に

曾村, みずき
東京藝術大学大学院音楽研究科：博士後期課程

<https://hdl.handle.net/2324/7385562>

出版情報：Tōyō ongaku kenkyū : the journal of the Society for the Research of Asiatic Music.
85, pp.61-90, 2020-08-31. The Society for Research in Asiatic Music

バージョン：

権利関係：© 2020 Toyo Ongaku Gakkai (The society for Research in Asiatic Music)



昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽

—コロムビア・ビクターを例に—

曾村 みずき

本稿は、薩摩琵琶や筑前琵琶に代表される近代琵琶楽の昭和戦前期におけるSPレコードの発売状況調査から、当時近代琵琶楽がどのように享受されていたかを明らかにするものである。本研究では、国立国会図書館所蔵の各レコード会社の月報および総目録から、近代琵琶楽のSPレコード発売情報を網羅的に調査・抽出した。本稿では、欠号の少ないコロムビアおよび廉価盤のリーガルレコード、ビクターおよび廉価盤のビクター・ジュニアレコード、ビクター大衆盤、スターレコード、ビクターZ盤を対象とする。

本論文では、大正期までの近代琵琶楽のレコード収録状況を概観したうえで、昭和戦前期の発売調査結果から、曲種・曲目・演奏者の三点に着目して分析した。さらに、本研究の対象時期に発売された近代琵琶楽の時局レコードを取り上げ、収録された題材・演奏者の傾向を考察した。

レコード発売数より、大正初期までの錦心流宗家・永田錦心の人気から一転して、大正後半から昭和期にかけては筑前琵琶が広く享受されていった。一方で、近代琵琶楽のレコード収録曲には、曲種を問わず、薩摩・錦心流琵琶で人気となった楽曲・題材が選択された傾向がみられた。また琵琶演奏家には、レコード会社専属として収録を行った者もあり、さらに時局物を含むレコード収録に積極的に取り組むことで、自身の名前や演奏の普及に努め、音楽活動の場を拡大しようとした。

昭和戦前期では、邦楽レコード発売開始当初から、琵琶のレコードは多く発売されたが、廉価盤創始とともに発売レベルは次第に廉価盤へと移行し、発売数は減少していった。その一方で、新たな収録も行いながら、廉価盤からは昭和一〇年代前半まで一定数の発売があり、近代琵琶楽は昭和期以降に低迷期へと向かうものの、筑前琵琶を中心にこの時期も人気が続いていた。そして戦況が激化していく中で、人気を維持するための試みの一つとして、時局レコードを様々な題材で即時的に発売・収録する傾向が強まっていった。

一 はじめに

一― 背景、目的、対象

近代琵琶楽は、薩摩琵琶や筑前琵琶といった、明治後期から大正期にかけて東京を中心として全国的に流行した琵琶楽である。こうした近代琵琶楽の流行の背景には、新たな流派の成立や音楽内容の発展がある一方で、レコード発売やラジオ放送といったメディアの影響も多分にあると考えられる。これまでの近代琵琶楽研究では、音源資料を用いた音楽分析が取り組まれてきたが（薦田二〇〇八、曾村二〇二〇）、分析対象となるレコードの発売状況を扱う研究は行われていない。また近代琵琶楽のレパートリーには、歴史的な題材を扱った古典曲のみならず、同時代の出来事を題材にした時局物も多く、日清・日露戦争期からとりわけ戦争を題材にした新作琵琶歌が多く作られた（《常陸丸》《橘大隊長》等）。昭和時代に入って以降も、満州事変をきっかけとして時局物の琵琶歌が盛んに作曲され、水島結子（二〇一四）は、第二次世界大戦期の琵琶歌レパートリーを、戦争物に着目して調査した。

こうした背景から、本研究は昭和戦前期、すなわち第二次世界大戦終戦までを対象に、各レコード会社のSPレコード発売状況を調査し、収録楽曲や演奏者の傾向分析を

通して、当時近代琵琶楽がどのように享受されていたのかを明らかにすることを目的としている。

筆者は、国立国会図書館（以下「国会図書館」と表記）に所蔵される各レコード会社の月報および総目録を調査し、近代琵琶楽のレコード発売調査を網羅的に行った。月報とは、レコード会社が刊行する月刊新譜目録で、基本的には「カタログ／レコード番号、曲種、曲名、作歌作者、枚数、演奏者、価格、レコードの種類（赤盤・黒盤等）」といった項目が一覧に記載される資料である。実際のレコードの発売は、月報の前月下旬であることが多かった。続いて総目録は、それまでに発売されたレコードが基本的にはすべて掲載される。ただし目録は演奏者ごとに記載されるため、総目録のみでは、具体的な発売時期を特定することはできない。また、月報にも刊行年における前月までの既発売目録が掲載されているものもあり、こちらは年一回刊行される総目録よりも掲載される期間の範囲が狭く、レコード発売時期の特定がしやすい場合がある。そのため、月報の新譜情報を中心に、総目録および月報の既発売目録で情報を補って分析を行った。とりわけ、昭和戦前期に近代琵琶のレコード発売が多く確認できたレコード会社には、コロムビア、ビクター、タイハイ、ニットー、テ

イチク、ポリドール、キング等が挙げられる。

しかし、国会図書館所蔵のそれらの目録は、レコード会社によって所蔵状況に差があり、すべてのレコード会社の発売状況を記述するのは困難である。そこで本稿では、比較的欠号の少ないコロムビアおよびその廉価盤であるリールレコード（以下「リール」と表記）、ビクターおよびその廉価盤であるビクタージュニアレコード（後にビクター大衆盤、以下「ジュニア」と表記）、スターレコード（以下「スター」と表記）、ビクターZ盤（以下「Z盤」と表記）を対象とし、曲種、曲目、演奏者の三観点から、収録内容の傾向を考察する（第三章）。調査対象期間は、コロムビアは「日本コロムビア蓄音器株式会社」設立後、邦楽レコード発売が開始された昭和三年（一九二八）一月以降、ビクターは「日本ビクター蓄音器株式会社」設立後、邦楽レコードの発売が始まった昭和三年（一九二八）四月以降とし、それぞれ終戦前の発売中止までの期間とする。

また、本研究での対象時期は、各レコード会社からさまざまなジャンルにおいて時局レコードが頻繁に発売された期間でもあり、そうした状況は近代琵琶楽でもみられた。そこで本稿では、コロムビア・ビクターおよびそれらの廉

価盤で発売された時局レコードを取り上げ、近代琵琶楽における時局レコード制作の実態を明らかにする（第四章）。また本稿では、とりわけ戦争を題材にしたレコードを「時局レコード／時局物」として記述する。

一―二 各レコード会社概要

これまでに各レコード会社より社史が複数刊行されているため、本稿では対象期間である邦楽レコード発売および廉価盤の創始を中心に記述する。また、国会図書館におけるコロムビア・ビクターおよびそれらの廉価盤の邦楽レコードの月報・総目録の所蔵状況は、【表一】の通りである。

(一) コロムビア・リール

明治四〇年（一九〇七）一〇月に「日米蓄音機製造株式会社」が設立され、明治四二年（一九〇九）には第一回新譜が発売された。翌年一〇月には「株式会社日本蓄音器商会」を創立（以下「日米蓄音機製造株式会社」「株式会社日本蓄音器商会」を合わせて「日蓄」と表記）、大正四年（一九一五）には製品を片面盤から両面盤へ切り換えたと同時に、再発売や新譜を「ニッポノホン」に統一した。

【表一】国会図書館における各レーベルの月報・総目録所蔵状況一覧

(2019年12月7日現在)

レーベル	コロムビア (ニッチク)		コロムビア大衆盤 (リーガル)		ビクター		ジュニア・大衆 盤・スター・Z盤	
1928	○	○	/	/	○	/	/	/
1929	○	○	/	/	○	○	/	/
1930	○	○	/	/	○	○	/	/
1931	○	○	/	/	○	○	/	/
1932	1, 2, 4-12	○	/	/	○	○	×	/
1933	○	○	9, 12	○	○	○	2, 4-12	/
1934	○	○	1, 4, 9, 10	×	○	○	○	○
1935	○	○	5-10, 12	○	○	○	○	○
1936	○	○	1, 2, 8, 9, 11, 12	○	○	○	○	○
1937	○	○	○	○	○	○	1-9, 11, 12	○
1938	1-5, 8, 9, 11, 12	○	1-5, 8, 9, 11, 12	○	○	○	1, 2, 4-12	○
1939	○	○	○	○	○	○	○	○
1940	1, 2, 4-12	○	1, 2, 4-12	○	○	○	○ (1-3?)	○
1941	○	×	○	×	○	○	○	○
1942	1, 4-12	○ (抜粋)	1, 4-12	○ (抜粋)	○	○ (抜粋)	○	○
1943	1-5, 7, 8, 10-12				1-4, 6-12	○		○
1944	2				1, 3			

〈凡例〉

- ・各レーベルの左列に月報、右列に総目録を記載した。
- ・所蔵がある場合は「○」、ない場合は「×」で示した。
- ・月報は12ヶ月分すべてが揃っていない場合、所蔵がある月を記載した。
- ・月報・総目録の刊行が確認できなかった年は空欄とした。
- ・ビクター1943年1～3月分は1943年5月発行「番号順総目録」より抜粋した。

そして、昭和三年（一九二八）一月には「日本コロムビア蓄音器株式会社」が設立され、同年一月には邦楽レコードの初回発売があり、琵琶のレコードは一種発売された。昭和一八年（一九四三）四月新譜からレーベルを「ニッタク」と改称するが、昭和二〇年（一九四五）三月頃にはレコードの生産が中止された。

リーガルは、昭和八年（一九三三）一月からコロムビアの廉価盤として発売されたレーベルである。当初は旧オリエント、ヒコキ、イーグルの再発売が多く、第一回発売では六八〇枚が発売され、昭和一八年（一九四三）二月頃まで発売は続いた。昭和八年（一九三三）版の総目録には琵琶のレコードが掲載されているが、おそらく昭和七年（一九三二）までの他レーベルの再発売だと考えられる。価格は、コロムビアの一般的な黒盤が一枚一円五〇銭であったのに対して、リーガルは一枚八〇銭で、戦況の悪化に伴ってそれぞれ次第に高騰していった。

（二）ビクター・スター・ジュニア・Z盤

「日本ビクター蓄音器株式会社」は、昭和二年（一九二七）九月に設立された。邦楽レコードの発売は翌年四月に開始し、琵琶のレコードは三種発売され、当時の

人気が高さがうかがえる。

ビクターの廉価盤であるジュニアは、昭和七年（一九三二）二月の新譜が初回とされる。価格はビクターの一般的な黒盤が一枚一円五〇銭であったのに対し、ジュニアは一枚一円であったが、コロムビアと同様に統制等により次第に値上がりした。国会図書館には昭和八年（一九三三）二月以降の月報が所蔵されているが、その既発売目録には琵琶のレコードは記載がなく、琵琶のレコード初回発売は昭和八年（一九三三）三月と推定できる。以降ジュニアの発売は続くが、昭和一一年（一九三六）四月からはビクター大衆盤として発売された。さらに昭和一二年（一九三七）七月には、廉価レーベルを独立させた形でスターからの発売が開始した。しかしその発売は昭和一三年（一九三八）六月を最後にみられなくなり、同年七月からはZ盤として廉価盤の発売が続いた。

二 大正期までの近代琵琶楽のレコード収録状況と琵琶楽

関係者の反応

明治期における邦楽レコード収録については、明治三六年（一九〇三）にロンドンから出張録音を行った、英国グラモフォンによる録音がよく知られているが、その録音群

には近代琵琶楽のうち薩摩琵琶が含まれていた。薩摩琵琶奏者の平豊彦により六曲を収録し、そのうち五曲は復元され、当時の音を現在でも聴くことができる。これら五曲は、それぞれ異なる薩摩琵琶の曲節を含む内容で、多様な音楽要素を収録しようとした意図がうかがえる。^(注2)

蠟管レコードに吹き込んだ琵琶奏者には、筑前琵琶では橘智定(初代旭翁)、橘友子(旭桜)、薩摩琵琶では平豊彦、那須祐直、吉水経和(初代錦翁)がいた。薩摩琵琶奏者であった西幸吉や四元義一は、「夜店に於て料金で聴かせる事は正に琵琶の品位を穢すもの」^(注3) だとして、蠟管への吹き込みに反対していたこともあり、学生間に最も流行したのは那須の録音だったという(椎橋 一九三一、一二頁、以下引用文はすべて新字体で表記した)。明治四二年(一九〇九)二月上旬、薩摩琵琶の一流派である錦心流宗家・永田錦心は、蠟管蓄音器への吹き込みの機会を得たが、当初の予定を変更して日蓄にて米国人技師により収録を行ったのが、初めての平円盤への吹き込みであった。同日には小田錦虎、肥後錦獅、岩見錦浦、萩原重子らを伴ったが、錦心は《石童丸》を収録し、これがきっかけとなって錦心の名も広く知れ渡ることとなった(永田 一九〇九、椎橋 一九三一)。明治四五年(一九一二)

までに日蓄に原盤を収めた琵琶奏者には、薩摩琵琶には永田錦心、那須祐直、岩見錦浦、筑前琵琶には高峰筑風、日高旭鶴が挙げられる。^(注3)

倉田喜弘(二〇〇六)によれば、日蓄での明治末期・大正初期における近代琵琶楽のレコードは、明治四二年(一九〇九)九月〜四五年(一九一二)七月には、薩摩琵琶が三種、筑前琵琶が二種、大正元年(一九一二)八月〜二年(一九一三)一月には、薩摩琵琶が一五種、筑前琵琶が七種発売された。また倉田は、薩摩琵琶が筑前琵琶よりも発売数が多い点に関して、永田錦心の人気の高さが影響したことを指摘している(七四〜七五頁)。その後、大正九年(一九二〇)に著作権法が改正されると、ニッポノホンではこれを一大転機として、永田錦心、高峰筑風、吉村岳城、榎本錦意(芝水)、雨宮錦峰(薰水)、豊田旭穂、高野旭嵐、高野旭方に演奏者を拡大して収録を行った。限定的ではあるが、国会図書館所蔵の大正期の発売分が掲載されるニッポノホンの総目録をみると、薩摩琵琶よりも筑前琵琶のほうが発売数は多く、大正期の間には筑前琵琶が薩摩琵琶の人気を凌駕していたようだ。^(注4)

レコード収録に関する琵琶演奏家の視点からの記述は、主に琵琶愛好家向けの月刊雑誌『琵琶新聞』(一九〇九)

四四)にみられる。同誌第一三九号(一九二二)には、新たなレコード吹き込みに際して、「今回日蓄から要請されて吹き込みをする、錦心流の小池幸水、雨宮薫水の、引用者注」吹込レコード売出しの暁は必ずや斯界の人気を湧立せるを信ずる」とし、レコード発売が演奏者自身の人気獲得にもつながる活動であることが示唆されている(注5)(森一九二二、二二―二三頁)。

一方、錦琵琶宗家・水藤錦穰は、以前から各レコード会社より吹き込み依頼はあったものの、レコードでは自身の演奏技術が損なわれて伝わることへの懸念から収録を断っていた(ビクター一九三〇、二頁)。天才少女として幼少期から演奏活動を行っていた錦穰であったが、本格的なレコード収録・発売は昭和五年(一九三〇)、すなわち錦穰が一九歳になる年以降であった。

レコードの普及と演奏状況に関しては、昭和十八年(一九四三)一〇月下旬の、筑前琵琶奏者の田中旭嶺による山口県の農村への慰問演奏における記述がみられる。「主に自分のレコードで知られて居る曲」を演奏し、「肉声^{ウダコエ}が聴かれるといふ昂奮^{ウツクシ}を面に表して飲んで頂いた時私も嬉しかった」と述べ、レコードの普及をふまえて、演奏曲目を選定していた様子がうかがえる(田中一九四四、七頁)。

琵琶奏者の中には、演奏技術が適切に伝達されるかという意識をもっていた者がいた一方で、レコード収録によって琵琶奏者自身の演奏が広く普及していく状況が認識されていたようだ。

三 発売調査結果とその分析

本調査によって得られた発売情報を一覧にまとめ、本稿末に【表二】～【表五】として掲載した。本調査における各レーベルの発売総数は、コロムビアが七五種、リーガルが八七種、ビクターが九二種、ジュニア・ビクター大衆盤・スター・Z盤が二四種で、総計二七八種となった。本研究では、他レーベルの再収録のレコードもカウントしている。

琵琶全体の発売数は、実態を把握するのが困難ではあるが、コロムビアについては洋楽を含む全五三種の種目の発売数が年代別にまとめられている(川添一九四〇、一〇六―一〇九頁)。このうち上位四〇位を抜粋したものが本稿末【表六】である。筆者による発売調査とは数字が合わない箇所もあるものの、琵琶のレコードの発売総数は全体の一二位で、比較的上位であった。琵琶のレコード発売数の推移は、昭和初期は発売総数一位の流行歌を凌ぐほどであったが、次第に減少し、とりわけ昭和

一一年(一九三六)以降は発売数が激減した。

次節以降は、琵琶のレコードでの具体的な収録内容について、曲種(三一一)、曲目(三一二)、演奏者(三一三)に着目して記述していく。

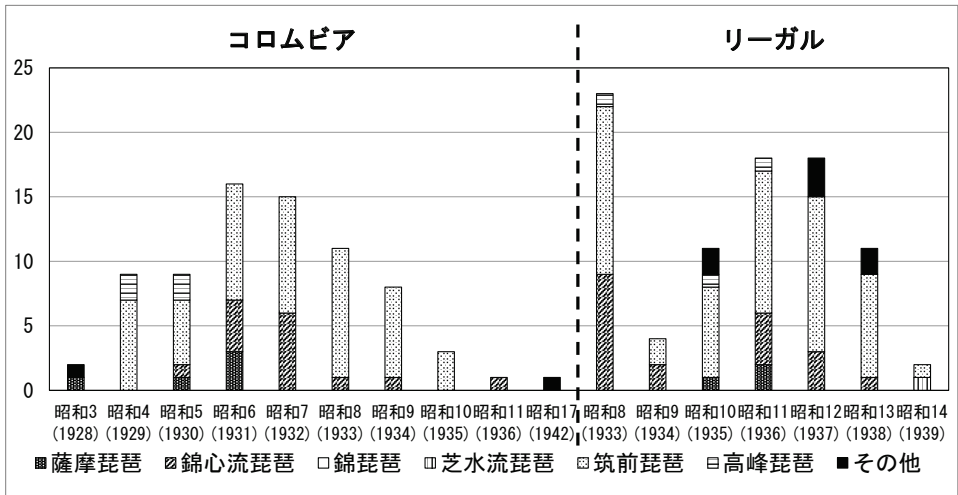
三一一 各レーベルにおける曲種別の発売総数の比較

本調査でみられた曲種は、薩摩琵琶、錦心流琵琶、錦琵琶、筑前琵琶、高峰琵琶、発売数が少数のものでは、童謡琵琶、琵琶講談、都琵琶、芝水流琵琶、鶴鳴流琵琶、琵琶主奏楽がある他、ピアノ伴奏付きの収録もなされた。

(二) コロムビア・リーガルの発売状況

コロムビア・リーガルの曲種別発売数の推移を表したのが【図一】である。点線左側がコロムビア、右側がリーガルの推移を示しており、昭和八年(一九三三)以降は重複している。

コロムビアでの琵琶のレコード発売総数は、昭和六年(一九三一)にピークを迎えた後に、次第に減少していった。一方リーガルは、昭和八年(一九三三)の発売分はほとんどが再収録のレコードであっても発売数は多く、翌年は減少するものの、昭和一一、一二年(一九三六、三七)



【図一】コロムビアおよびリーガルの曲種別発売数の推移

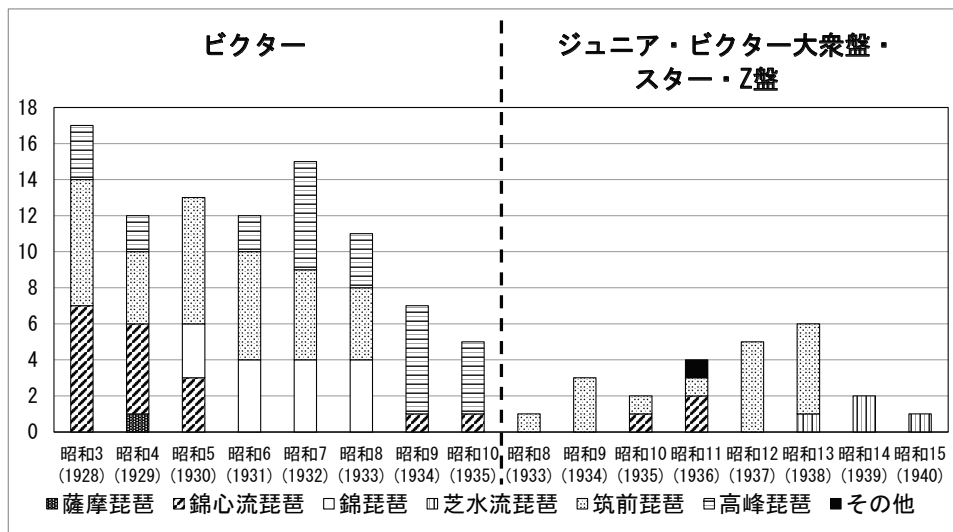
に向けて次第に増加し、コロムビアからリーガルへ移行するような形で発売されていた状況がうかがえる。

曲種は、筑前琵琶が割合としては多く、コロムビアとリーガルを合計すると六割を超える数であった。昭和七年（一九三二）一二月のコロムビア月報には、「先月は錦心流を発売して筑前党の皆様とにかく失望をお与へいたしました」との記載があり、筑前琵琶愛好者の声がレコード会社に届けられていた様子もみられる（九頁）。高峰琵琶の発売は、コロムビアでは昭和四、五年（一九二九、三〇）のみであるが、宗家・高峰筑風はコロムビアの専属期間を昭和六年（一九三一）に終えているため、以降は発売がなくなる（専属演奏家については、三―三にて詳述）。リーガルにのみ発売された曲種には、琵琶講談や都琵琶がある。都琵琶は実態が不明な点もあるが、目録には「薩調改造特許都琵琶」と記載され、薩摩琵琶系統の琵琶であったと考えられる。

(二) ビクター・ジュニア・ビクター大衆盤・スター・

Z盤の発売状況

ビクターおよびその廉価盤の発売曲数の推移を示したものが、【図二】である。点線の左側がビクター、右側が



【図二】 ビクターおよびジュニア・ビクター大衆盤・スター・Z盤の曲種別発売数の推移

ジュニア・ビクター大衆盤・スター・Z盤のグラフで、昭和八〜一〇年（一九三三〜三五）は年代が重複している。

ビクターでは、発売を開始してから六年間は毎年一〇種を超えるリリースがなされ、琵琶の人気の高さがかげえる。しかし、昭和八年（一九三三）にジュニアから発売されると、コロムビアと同様に廉価盤へと移る形で、昭和一年（一九三六）以降はビクターからの発売がみられなくなった。ビクターの廉価盤はコロムビアの場合と異なり、まったく同じ曲目・演奏者・枚数の発売は一種のみであった。スターでは、ビクターと同じ曲目・演奏者のものとして、田中旭嶺による収録が四種あったものの、枚数がすべて二枚から一枚に減っており、同じ内容ではないと推測される。

曲種の内訳は、コロムビア・リーガルと同様に筑前琵琶が最も多いが、高峰琵琶や錦心流琵琶、錦琵琶といった、語りの節回しが歌的なものが多く発売されている。錦琵琶はビクターのみで、コロムビア・リーガルから発売がなかったのは、演奏者である水藤錦穰がビクター専属であったためである（三―三にて詳述）。Z盤から発売があった芝水流琵琶とは、錦心流奏者であった榎本芝水が、昭和一年（一九三六）に錦心流から独立する形で創始した流

儀である。また鶴鳴流琵琶は、薩摩琵琶と筑前琵琶の折衷とされた曲種である。

三―二 収録された曲目の分析

（一）レコード発売と演奏会上演

本調査における発売回数が多い楽曲は、曲種を問わずに合計すると、『石童丸』（一三種）、《本能寺》（一二種）、《常陸丸》（一〇種）、《川中島》（八種）、《台湾入》（同上）、《白虎隊》（七種）であった。^{（注6）}

これらの楽曲は、演奏会での上演回数も多かったのだろうか。『琵琶新聞』には、紙上の演奏会記録から統計をとった、演奏曲目回数調査の記事が何度か掲載されており、ここでは『琵琶新聞』第二七五〜二八〇号（昭和九年七〜二月）の期間を例に、上位五曲を以下に挙げる（一九三五、一四頁）。薩摩・錦心流琵琶の部では、『白虎隊』（五五回）、《本能寺》（五一回）、《龍の口》（四九回）、《西郷隆盛》（四七回）、《城山》（四五回）、《常陸丸》（同上）、筑前琵琶の部では、『関ヶ原』（二八回）、《堅田落》（二五回）、《安宅の関》（二二回）、《衣川》（一八回）、《五條橋》（一六回）であった。薩摩琵琶・筑前琵琶を合計すると順位は変動するが、薩摩琵琶や錦心流琵琶では、演奏

会での上演回数が多い楽曲はレコードにも多く収録される傾向がみられた。その一方で、筑前琵琶ではレコード収録回数が多い楽曲が、必ずしも頻繁に演奏会で演奏されるわけではない、という結果が得られた。上演回数が多い楽曲は筑前琵琶特有の題材が中心であり、演奏会では薩摩琵琶と共通した題材の楽曲よりも、筑前琵琶独自のレパートリーが演奏されていたという特徴がうかがえる。また、レコード収録回数の最も多い《石童丸》は演奏会上演回数の上位に入っておらず、薩摩・錦心流琵琶と筑前琵琶を合計しても二〇回にとどまった。本曲は永田錦心の録音が広く普及し、錦心没後にも再販が繰り返された音盤でもあったため、実際に演奏するよりも聴いて楽しむ楽曲となったとも考えられる。

(二) 合奏形式で収録された楽曲

近代琵琶楽の演奏形式は、弾き語りによる独奏が基本だが、合奏形式で収録されたレコードも複数発売された。合奏のような規模の大きい収録は、コロムビア・ビクターから発売され、廉価盤からは再発売と推測される一曲のみがみられた。

古典曲のレパートリーでもある《義士の討入》(コロム

ビア一九二九)は、筑前琵琶と琴(マユ)による編成であり、他には筑前琵琶奏者二名による語りの掛合での《紅葉狩》(ビクター一九三三)等があった。本調査で最も大きな合奏と推定される楽曲は《あ、特別攻撃隊》(コロムビア一九四二)であり、琵琶、唄、二絃琴、三味線、尺八による合奏で、琵琶および唄は筑前琵琶奏者が担当した。一方洋楽器との合奏曲には、筑前琵琶の《橋弁慶》《宇治川》(ビクター一九二八)があり、ビクター音楽部の演奏家によるピアノ伴奏付きであった。これらの合奏はすべて筑前琵琶・高峰琵琶によるもので、薩摩琵琶およびその流派にはなかった。

合奏形式のレコードは、本調査対象期間のうちレコード発売初期にしばしばみられ、レコード発売開始に伴って、新たな試みの企画がなされたことが推測される。また、レコード会社が抱える西洋楽器演奏家と琵琶との異色の合奏は、その会社の宣伝ともなったであろう。

(三) 文部省推薦レコード

本調査では、とりわけ総目録に「文部省推薦レコード」の印が散見され、近代琵琶楽でも文部省推薦レコードが選定されていた。

文部省推薦レコードの取り組みについては、推薦レコードの審査員を務めた田邊尚雄による記述を参照しながら、まずは推薦レコード選定事業開始に至るまでの経緯を概観する。^(注)大正期の蓄音器レコードの普及に伴い、社会教育における指導の必要性が唱えられたことを背景に、大正二一年(一九二三)一月から文部省社会教育課内において文部省のレコード推薦制度が開始され、同年四月に第一回推薦レコードが発表された。昭和九年(一九三四)以降は内務省警保局図書課によりレコード検閲が行われ、文部省による推薦レコードは、「聴いても差支ない」と許可された範囲内から、「良いレコードだからお聴きなさい」と推奨するものを選定する方針へと改めた(一六四頁)。審査の基準は、楽曲の性質・演奏者・レコード製作法・レコードの物資等であった(一七七～一七八頁)。

本調査では計三五種の文部省推薦レコードを確認でき、これらは【表二】～【表五】の備考欄に示した。曲種は筑前琵琶が約三分の二の割合を占めており、近代琵琶楽の古典曲および明治期における同時代物が大半で、選定された回数が多い楽曲は、『白虎隊』『常陸丸』が各三種、『石童丸』『湖水渡』『台湾入』『本能寺』が各二種であった。また、時局物は『肉弾三勇士』『北満嵐(噫経理部隊十六士)』『空

閑少佐』の三種が選定された。その他、本稿では扱わないレーベルの近代琵琶楽の音盤も文部省推薦レコードに認定されており、今後は文部省による出版資料も含めて実態を調査したい。

三三三 レコード収録を行った演奏者と専属制度

レコード収録された演奏者は、独奏が三〇名、合奏が七組で計三七組であった。とりわけ、コロムビア・ビクター合わせて一〇種以上のレコードが発売された演奏家は、錦心流琵琶の榎本芝水(一八種、後に芝水流琵琶)、雨宮錦峰(薰水)(一一種)、大館錦棋(一〇種)、福澤錦凌(同上)、錦琵琶の水藤錦穰(一五種)、筑前琵琶の山元(益満)旭錦(四四種)、田中旭嶺(四一種)、高野旭嵐(三一種)、豊田旭穰(静芭)(二六種)、高峰琵琶の高峰筑風(二七種)であった。

レコード会社における専属契約とは、優れた芸術家・作曲家を他社へは吹き込ませないために自社の専属とする契約で、一定の契約期間をもつものや、期間を設けずに吹き込む音盤数で制限するものがある。こうした専属制度は明治時代から行われていたが、当初は「後続追従の新会社乃至は外国会社の渡日録音に際して横取りされる憂目

を未然に防ぐ手段」として制度が設けられていた（山口一九三六、一四〇頁）。

近代琵琶楽での専属演奏家の一人に、ビクター専属であった水藤錦稜がいる。大正一五年（一九二六）に従来の薩摩琵琶を改革した錦琵琶を開発した錦稜は、当初は錦心流の一派として演奏活動を行っていた。しかし昭和五年（一九三〇）三月に、錦心流幹部であった養父・水藤枝水が横暴等を理由に錦心流を追放されると、同様に錦稜も錦心流を離れざるを得なくなった。そのような折、ビクターから依頼があり、同年七月新譜で第一回として《白虎隊》を発売したところ売れ行きがよかったため、専属となつて吹き込みを行った。錦琵琶は、昭和五〜八年（一九三〇〜三三）の間、年に三、四種の新譜を発売したが、これらはすべて水藤錦稜による演奏である。専属期間後はポリドールやキングといった他レコード会社で、ビクターから発売された楽曲を中心に、新曲を含む新たな収録・発売が行われた。

筑前琵琶では、高野旭嵐・高野旭方姉妹が昭和六年（一九三一）一〇月の時点で「十年前より引続きコロムビア、イーグルの専属」であったという記述がみられたほか（『琵琶新聞』一九三一年一〇月、二三三頁）、豊田旭稜と

高峰筑風が永らくコロムビアの専属であったが、年期切れとなった記事が掲載されている（『琵琶新聞』一九三一年七月、二七頁）。その後高峰筑風は、昭和八〜一一年（一九三三〜三六）版のビクター総目録に、「ビクター専属」として名前があり、レコード会社間での専属演奏家獲得の動向がうかがえる。

以上第三章では、発売調査で得られた情報から複数のトピックを立てて論じてきたが、次章では昭和戦前期において特徴的な時局レコードについて詳述する。

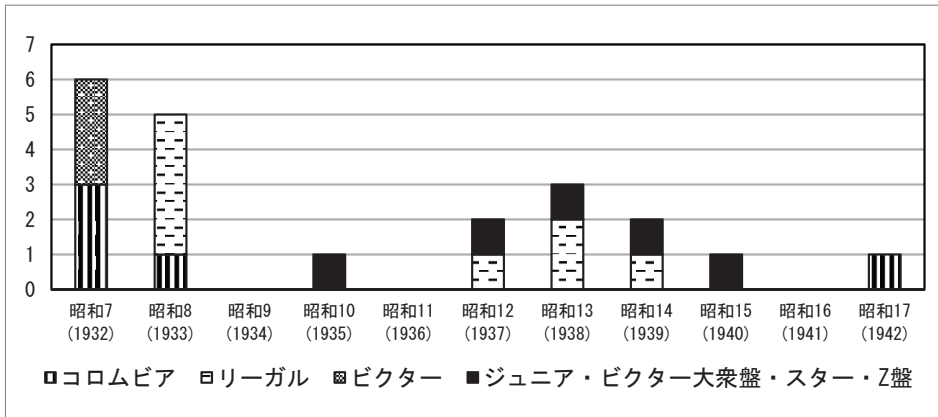
四 近代琵琶楽の時局レコード

調査対象時期には各レコード会社から多岐にわたる種目で時局レコードが発売されたが、近代琵琶楽も例外ではなかった。近代琵琶楽の時局レコードは、国会図書館所蔵の月報・総目録から七七種を確認できた。とりわけテイチクから多く発売があり、その数は近代琵琶楽の時局レコード全体の三割近くを占める。

本稿で対象とする、コロムビア・ビクターおよびそれらの廉価盤での時局レコード発売数は計二一一種で、これらのレベルでの近代琵琶楽のレコード発売総数の一割未満であった。割合としてはそれほど多くはないものの、明治期

からの同時代の出来事を題材に琵琶歌を作る流れは、昭和戦前期にも引き継がれていた。

琵琶界においては、時局物を新しく作曲するのには近代琵琶が最も適当だとし、こうした新作琵琶歌の創作を推奨する記事もみられた。大坪草二郎(一九三四)は、日清・日露戦争、満州事変の際には、「事局を題材とした新曲の発表は琵琶が最も盛んであり、効果的」であったとし、「此種の実行については、琵琶の独壇場の観」さえもあると述べている。さらに、「古典的な名曲の保存・新作は必要だが、引用者注」日々生動する社会事象を琵琶化して大衆に呼び掛けることも、斯道発展の上に甚だ有効」であり、「時事新曲の作歌、作曲、演奏については、多少目新らしい、変つた趣向を凝らすといふことも必要」だとし、時局を題材とした新作発表の重要性を指摘している(一頁)。「多少目新らしい、変つた趣向」がどのようなものであったかは、実際に音源を聴かないと不明ではあるが、国立国会図書館歴史の音源(以下「歴史的音源」と表記)に残されている榎本芝水《満洲事変》(コロムビア一九三二)の前半部分を聴いてみると、語りの旋律や琵琶の弾法といった音楽的内容は従来の古典曲に準ずるものであり、新鮮さはあまり感じられない。その一方で、同じ



【図三】近代琵琶楽の時局レコード発売数の推移

く歴史的音源に残された榎本による《少年航空兵》(乙盤一九四〇)では、セリフや他の楽器が挿入される点で工夫がみられる。^(注8)

本調査にみる、時局レコード発売数の推移をグラフにしたものが【図三】である。時局レコードの発売数が増加する年代には、昭和六年(一九三一)九月に起きた満州事変以降、および昭和十二年(一九三七)七月に起きた日中戦争以降の二つの山が見出せる。次節以降では、これら二つの時期に区分し、題材・演奏者に注目して傾向を分析する。

四一 満州事変以降

郡修彦(二〇一三)は、戦争とレコードが密接な関係をもつようになったきっかけを、昭和七年(一九三二)における肉弾三勇士主題作品のレコード化だと指摘しており、近代琵琶楽においても同年を境に時局レコードが多く作られるようになっていった。その一方で、肉弾三勇士の事件が起こる前の昭和七年(一九三二)二月新譜(同年一月二〇日発売)では、前述の榎本芝水《満洲事変》が発売されている。また、満州事変に関するレコード収録については、『東京読売新聞』に当時の状況が述べられている。

満洲事変を題材としたレコード及びそれに付随して戦争物レコードが最近になってやつと各社から洪水の如く発売された。これはレコード会社の製作過程が吹込みから発売までに少くとも最短一ヶ月乃至二ヶ月を要するために漸く昨今になって市場に現れた次第である。(一九三三年一月二五日夕刊)

さらに同記事では、榎本の《満洲事変》のレコード批評も掲載され、「演奏も流石にうまいが歌詞も国民の公憤を切実に詠じてゐる」と好評を得ている。満州事変勃発に際してレコード発売を企画したものの、技術面で即時的に発売ができなかった状況があった。その後《肉弾(爆弾)三勇士》の頃には、事件後間もないレコード収録が可能となった。

またこの時期は、『満洲事変』《肉弾(爆弾)三勇士》《古賀連隊長》を中心に、複数の琵琶奏者かつ多様な曲種により、これらの時局レコードが繰り返し発売された。川添(一九四〇)には、「満洲事変・上海事変に刺戟されて抬頭せる軍歌・時局歌は「肉弾三勇士」レコードを以て、最高潮に達し、国民的士気の鼓舞に国家的一役を果し、今次支那事変への示唆をなした」(一一一頁)という記述がみら

れ、この時期の時局レコードが、後の日中戦争での時局物発売に影響を与えていた。

四一二 日中戦争以降

その一方で、日中戦争以降では、満州事変の頃とは時局レコード発売状況の様相が異なっていた。具体的な曲目を比較すると、昭和十二年(一九三七)以降は、《南苑の華 噫酒井少佐》(リーガル 一九三七)や《空軍の華―福山航空兵大尉》(Z盤 一九三九)等、題材となる人物が多様化され、特定の出来事や人物を繰り返して取り上げて収録するという傾向はみられなくなった。コロムビアでは、日中戦争が勃発すると企画会議を開催し、「重大時局に力強い音楽報国を期し、前線の士気を鼓舞すると共に、銃後国民の精神作興に資すべく国策線に添って勇往邁進する」という主旨の普及と同時に、娯楽レコードとしての本質も念頭に置きながら、会社業績の向上に腐心した状況があった(川添 一九四〇、一一七頁)。

錦心流奏者であった榎本芝水は、「支那事変」を題材にした新作を多く作曲したが(曾村 二〇二〇、八五―八六頁)、この時期には時局レコードの収録も複数行った。水島結子(二〇一八)は、琵琶奏者の中には「当時のエン

ターテインメントとして戦争ビジネスに琵琶で貢献しよう」と積極的に参加する者が多かった」と指摘したが(三三頁)、榎本もその一人であった。さらに、榎本が錦心流から独立して芝水流琵琶を創始したのは日中戦争勃発の前年であり、演奏会やレコード収録において、こうした時局物の新作を積極的に発表したことは、新流派を展開させていくのにも効果的であったと考えられる。

こうした戦時下におけるレコード会社や演奏家の活動状況について、辻田真佐憲(二〇一九)は戦時下の歌謡を取り上げて、「企業(レコード会社、新聞社など)が営利を求めて企画を立て、クリエイター(作詞家、作曲家など)が活躍の場を求めて音楽を作り、そして大衆が娯楽を求めてそれらを消費した側面」があったことに注目したが、先に挙げたコロムビアや榎本もその一例だといえる。近代琵琶楽においても、演奏家自身の活動の場としてレコード収録を行い、それらを聴衆が享受することで戦時下における時局レコードも娯楽の一つとして楽しまれていた背景がみえてくる。

五 おわりに

最後に、レコード会社、演奏家の立場から近代琵琶楽の

レコード発売状況についてまとめ、レコードを通して近代琵琶楽が聴衆にどのように享受されていたかを考察する。

まずレコード会社の視点からは、大正期までの近代琵琶楽の流行を受けて、昭和期でのレコード発売開始当初はほぼ毎月近代琵琶楽のレコードを発売していたが、各社の廉価盤が登場すると、発売は廉価盤からへと移行し、次第に発売数は減少した。一方で、昭和一三年（一九三八）頃までは廉価盤での発売が一定数あり、再発売だけでなく新たに収録も行ったことから、近代琵琶楽のレコードはこの時期もまだ「売れる」と判断されていたことがわかる。また、専属制度をもとに優秀な演奏家を確保しながら、大規模な合奏や即時的な時局レコードの発売といった企画を通して、業績向上を常に図っていた。

続いて近代琵琶楽演奏家の立場としては、昭和時代以降の電気式録音への移行に伴って録音技術が上がり、演奏技術を損なわずして収録が可能となった。レコード収録により、自身の名前や演奏を広く普及させることができること認識したうえで、琵琶奏者たちは熱心にレコード収録を行ったと考えられる。また戦況が激化していく中で、時局レコード収録に積極的に取り組むことで、自身の音楽活動の場を拡大しようとした者もいた。

そしてレコードの聴衆には、発売数の観点から、大正初期までは薩摩琵琶系統、すなわち永田錦心の人気が大きかったが、大正期半ばから昭和期にかけて次第に筑前琵琶へと人気は移った。錦心は当時の琵琶界を牽引する一人であったが、昭和二年（一九二七）に没して以降、レコード収録を行う錦心流派者はいたものの錦心ほど影響力をもつ者は現れず、筑前琵琶のほうが多く享受されることとなった。その一方で、とくに筑前琵琶においては、レコード収録回数が多い楽曲と演奏会上演回数が多い楽曲は、必ずしも一致しない状況があった。演奏会での曲目は筑前琵琶独自のレパートリーが中心であったが、レコード収録では、詞章は異なる場合もあるものの、薩摩・錦心流派琵琶で人気となった楽曲・題材が選択された傾向がみられ、大正期までに隆盛を誇った薩摩琵琶、とりわけ永田錦心の影響が推察される。また、レコードが評判となった琵琶奏者には、技巧的な語りの節回しを用いる等の演奏上の特徴があり、こうした音楽内容とレコード収録とのかかわりについては、今後詳細な音楽分析をふまえて改めて検証したい。

以上のレコード発売状況より、近代琵琶楽は、昭和時代以降は次第に低迷期へと向かったものの、昭和一〇年代前半でも筑前琵琶を中心として人気が続いていた。そして、

レコード会社の制作意図、演奏者自身の活動姿勢、聴衆からの需要が交差してレコードが発売されていた中で、近代琵琶楽における時局レコードは、人気を維持するための新たな試みの一つとして、様々な題材で即時的に発売・収録する傾向が日中戦争以降さらに強まった。

付記

本論文は、東洋音楽学会第六九回大会にて行った口頭発表の内容を補筆・修正したものである。また本稿の執筆にあたり、科学研究費助成事業（特別研究員奨励費、二〇一八～二〇二〇年度）「一九三〇～四〇年代の薩摩琵琶の音楽実態とその社会的位置づけ―戦争の影響に着目して―」（課題番号一八J二二三九〇）の助成を受けた。

注

- (1) 『日蓄（コロムビア）三十年史』一九四〇、『コロムビア五〇年史』一九六一、『日本ビクター五〇年史』一九七七他。
- (2) 薩摩琵琶の曲節は四種（基吟^{もとぎん}（地の部分））「崩レ（合戦場面）」「吟替り^{ぎんがわり}（憂愁の場面）」「吟詠（漢詩や和歌）」があり、薩摩琵琶の音楽は、曲節の組み合わせで構成される。また平豊彦による五曲の音源は、『全集 日本吹込み事始』一九〇三年ガイズバーク・レコーディングス』（二〇〇一）で聴取が可能である。

- (3) 川添一九四〇、二〇～二二頁。後に永田錦心は「錦心流琵琶」、高峰筑風は「高峰琵琶」という曲種でレコードが発売される。
- (4) 大正七年（一九一八）七月・一〇月版、大正八年（一九一九）九月改版および大正一四年（一九二五）一〇月発売・昭和二年（一九二七）九月発売レコードまでの総目録参照。
- (5) 執筆者は「森恒二郎」と記載されていたが、日蓄に勤務していた森垣二郎である可能性が高い。
- (6) 前篇・後篇等と分かれて別月に発売された場合は、あわせて一回と数えた。
- (7) 田邊一九四二、以下、文部省推薦レコード事業創始までの経緯、審査基準については本著を参照・引用した。
- (8) ただし他楽器との合奏は以前から取り組まれており、新たな試みの経緯については、時局物に限らず近代琵琶史の流れにおいて検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 生明俊雄 二〇一六 『二〇世紀日本レコード産業史―グローバル企業の進攻と市場の発展―』東京、勁草書房。
- 大西秀紀・編 二〇一〇 『SPレコードレーベルに見る日蓄―日本コロムビアの歴史―』京都、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。
- 川添利基・編 一九四〇 『日蓄（コロムビア）三十年史』神奈川、日本蓄音器商会。
- 倉田喜弘 二〇〇六 『日本レコード文化史』東京、岩波書店。
- 郡修彦 二〇一三 『政治・戦争とレコード―歴史的音源。』二〇一九年一二月七日閲覧 URL : http://rektion.dnrdi.go.jp/ja/ongen_shoukai

06.html

薦田治子 二〇〇八 「琵琶楽の流れ 薩摩琵琶、筑前琵琶、現代へ」

『日本の伝統芸能講座 音楽』京都、淡交社。

コロムビア五〇年史編集委員会・編 一九六一 『コロムビア五〇年史』神奈川、日本コロムビア。

曾村みずき 二〇二〇 「戦前・戦後における琵琶奏者・榎本芝水の活動―音楽的变化を中心に―」『音楽文化学論集』第一〇号、八三―九三頁。

田邊尚雄 一九四二 「社会教育とレコード政策」『レコードとその音楽』京都、人文書院。

田邊秀雄 一九四二 『レコードとその音楽』京都、人文書院。

辻田真佐憲 二〇一九 「商品」だった戦時下の時局歌謡―歴史的音源。 (二〇一九年十二月七日閲覧) URL : http://teikond.ndl.go.jp/ja/ongen_shoutai_15.html

東芝EMI 二〇〇一 『全集 日本吹込み事始―一九〇三年ガイズバーク・レコーディングス― (解説書)、東京、東芝EMI・TOCF-五九〇五一。

日本コロムビア蓄音器 一九三二 『コロムビアレコード十二月新譜』、神奈川、日本コロムビア蓄音器。

日本伝統文化振興財団 二〇一〇 『日本の基礎音楽資料としてのSP盤の実態に関する調査研究「報告書」』東京、日本伝統文化振興財団。

日本ビクター蓄音器 一九三〇 『ビクター・レコード音譜目録七月号』東京、日本ビクター蓄音器。

日本ビクター株式会社五〇年史編集委員会・編 一九七七 『日本ビクター五〇年史』東京、日本ビクター。

水島結子 二〇一四 「第二次大戦期の琵琶歌のレパトリー―琵琶新聞」紙上発表の新作と演奏曲目―」『研究成果報告書 近代琵琶楽の成立と展開―基礎資料の収集―』平成二三―二五年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (c))) 課題番号二三五二〇一九一、六一―七六頁。

水島結子 二〇一八 「特集：近代の琵琶楽の様相 (三) 戦争により成長した近代琵琶楽の概要とこれから」『音楽の世界』第五七巻二号、三一―三四頁。

山口亀之助 一九三六 『レコード文化発達史』第一巻、大阪、録音文献協会。

雑誌・新聞記事 (刊行年月順)

永田錦心 二月上旬肥後、小田、永田、岩見、萩原の諸氏が平円盤蓄音機へ琵琶弾奏を吹込みたる時のスケッチ」『琵琶新聞』第三号、一九〇九年四月、一頁。

森恒二郎 「蓄音器吹込に就て」『琵琶新聞』第一三九号、一九二一年一月、二二―二三頁。

「筑前琵琶 見たり聞いたり話したり 専属解放」『琵琶新聞』第七八号、一九三一年七月、二七頁。

椎橋松亭 「思ひ出の記 (十四)」『琵琶新聞』第八〇号、一九三一年九月、二一―二四頁。

「高野旭嵐、高野旭方両女史の上京」『琵琶新聞』第八一号、一九三一年一〇月、二三頁。

「名盤寸評 満洲事変及び戦争レコード」『東京読売新聞』一九三二年一月二五日夕刊、六頁。

大坪草二郎 「琵琶の時事新曲に就いて放送局へ望む」『琵琶新聞』第

二七六号、一九三四年八月、一頁。

「愛吟番附」『琵琶新聞』第二八二号、一九三五年一月、一四頁。

田中旭嶺「感激の旅 農村慰問行」『琵琶新聞』第三八九号、

一九四四年一月、七頁。

参考資料

テイチク

月報 昭和七年（一九三二）一〇月

総目録 昭和二年（一九三七）一月新譜まで

月報 昭和二年（一九三七）七月・一〇月・一一月

月報 昭和三年（一九三八）二月・四月

月報 昭和五年（一九四〇）六月

ニッポノホン

総目録 大正七年（一九一八）七月版・一〇月版

総目録 大正八年（一九一九）九月改版

総目録 大正一四年（一九二五）一〇月発売レコードまで

総目録 昭和二年（一九二七）九月発売レコードまで

参考音源

榎本芝水 一九三二《満洲事変》二六六九〇～二六六九一、コロム

ビア、歴史的音源。

榎本芝水 一九四〇《少年航空兵》Z二七三～Z二七四、ビク

ターZ盤、歴史的音源。

（東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程）

昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽

〈凡例〉

- ・各レコード会社の月報を主要資料として作表した。補足資料として総目録、月報既発売目録、『レコードタイムス』（声の写真社、1935）、『日本伝統文化振興財団調査報告書』（2010）を用い、参照した際には備考欄に記入した。
- ・本目録には、月報記載の情報から「新譜年月、レコード番号、曲種、曲目、演奏者」を抜粋して掲載した。
- ・旧字体は新字体に改めたが、演奏者名の「澤」「邊」等はそのまま記載した。
- ・実際のレコード発売日は新譜年月の前月下旬が基本であったが、本研究では新譜年月に統一して入力した。
- ・「曲種」の項目は基本的に資料記載の通りに記したが、流派が判別できる際には流派名を記載した。「曲種」では「琵琶」を省略して記載し、薩摩琵琶のうち正派は「薩摩」と記載した。
例：筑前琵琶→「筑前」、錦心流琵琶→「錦心流」
- ・時局レコードには色を付けた。
- ・文部省推薦レコードは備考欄に「文推」と表記した。

【表二】コロムビアにおける近代琵琶楽レコード発売目録

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1928年11月	25411	童謡	天道虫／からすの手紙	豊田旭稜、童謡琵琶会員	
1928年12月	25416-25417	薩摩	鉢の木	吉村岳城	
1929年1月	25437-25438	筑前	湖水渡り	高野旭嵐	
1929年2月	25452-25453	筑前	義士の討入	高野旭嵐、 琴：高野旭方	
1929年3月まで	25474-25475	筑前	那須与市	高野旭嵐	
1929年7月	25562	筑前	井伊大老	高野旭嵐	
1929年7月	25563-25564	高峰	本能寺	高峰筑風	
1929年8月	25590-25591	筑前	松の廊下	高野旭方	
1929年11月	25670-25671	筑前	村上喜剣	高野旭方	
1929年11月	25693	高峰	露營の夢	高峰交楽会員	1930年後期総目録「高峰琵琶三楽」
1929年12月	25706-25707	筑前	義士の本懐	田中旭嶺	
1930年1月	25726-25727	筑前	高田の馬場	高野旭嵐	
1930年4月	25794-25795	薩摩	光秀の最後	吉村岳城	
1930年5月	25825-25826	筑前	山科の別れ	田中旭嶺	文推（1931年総目録）
1930年7月	25881	筑前	関ヶ原	高野旭嵐	
1930年9月	25943-25944	筑前	乃木大将	高野旭嵐	
1930年10月	25981-25982	高峰	台湾入	高峰筑風	
1930年11月	26008-26009	筑前	四条畷	豊田旭稜	
1930年11月	26010-26011	高峰	湖水渡	高峰筑風	
1930年12月	26033-26034	錦心流	別れの盃	福澤錦凌	
1931年1月	26063	筑前	加藤司書	高野旭嵐	
1931年1月	26064-26065	薩摩	石童丸（前篇）	田邊蘇川	1931年総目録に「前篇」、蘇川は元錦心流
1931年2月	26094-26095	筑前	義士の本懐	豊田旭稜	
1931年2月	26096-26097	錦心流	恩讐の彼方へ	雨宮錦峰	
1931年3月？	26156-26157	筑前	常陸丸	田中旭嶺	1931年4月月報既発売参照
1931年3月？	26158-26159	薩摩	石童丸（後篇）	田邊蘇川	1931年4月月報既発売参照
1931年4月	26199-26200	錦心流	龍の口	福澤錦凌	
1931年6月	26297-26298	筑前	小督	田中旭嶺	
1931年7月	26336-26337	筑前	安宅の関	高野旭嵐	
1931年8月	26381-26382	筑前	常陸丸	高野旭嵐	
1931年9月	26430-26431	筑前	赤垣源蔵	高野旭嵐	

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1931年9月	26432-26433	錦心流	湖水渡り	雨宮錦峰	
1931年10月	26496-26497	筑前	霊馬漣	田中旭嶺	
1931年11月	26543-26544	錦心流	山科の別れ	福澤錦凌	
1931年11月	26545-26546	筑前	小督	高野旭嵐	
1931年12月	26580-26581	薩摩	白虎隊	吉村岳城	
1932年1月	26630-26631	錦心流	橘大隊長	雨宮錦峰	
1932年1月	26632-26633	筑前	川中島	高野旭嵐	
1932年2月	26690-26691	錦心流	満洲事変	榎本芝水	葛生桂雨作歌、榎本芝水作曲、陸軍省推薦
1932年2月	26692-26693	筑前	石童丸	高野旭嵐	
1932年3月?	26743-26744	筑前	本能寺	豊田旭稜	1932年4月月報既発売参照
1932年4月	26785	錦心流	河内の宿	福澤錦凌	
1932年5月	26836-26837	筑前	古賀連隊長	高野旭嵐	村瀬時男作歌
1932年6月	26876-26877	筑前	肉弾三勇士	高野旭嵐	中野紫葉作、臨時発売、文推(1933年総目録)
1932年6月	26895	筑前	吉野静	豊田旭稜	
1932年7月	26945-26946	筑前	伊藤公	高野旭嵐	文推(1933年総目録)
1932年8月	26986-26987	錦心流	本能寺	榎本芝水	文推(1934年総目録)
1932年9月	27035-27036	筑前	小野訓導	高野旭嵐	
1932年10月	27075-27076	錦心流	石童丸	榎本芝水	
1932年11月	27116-27117	錦心流	常陸丸	雨宮薫水	文推(1934年総目録)
1932年12月	27152-27153	筑前	大高源吾	高野旭嵐	
1933年1月	27180-27181	筑前	大忠臣蔵(前篇)	益満旭錦	山下良輝作
1933年2月	27239-27240	筑前	大忠臣蔵(中篇)	益満旭錦	山下良輝作
1933年3月	27290-27291	筑前	大忠臣蔵(後篇)	益満旭錦	山下良輝作
1933年4月	27322-27323	筑前	大楠公	益満旭錦	山下良輝作、文推(1934年総目録)
1933年5月	27364-27365	筑前	伊賀の曙	益満旭錦	
1933年6月	27400-27401	筑前	松岡全権の獅子吼	益満旭錦	
1933年7月	27431-27432	筑前	台湾入	益満旭錦	文推(1934年総目録(第2版))
1933年8月	27465-27466	筑前	近藤勇	山元旭錦	
1933年9月	27511-27512	筑前	楠公河内の宿	山元旭錦	文推(1934年総目録(第2版))
1933年11月	27577-27578	錦心流	白虎隊	雨宮薫水	文推(1934年総目録(第2版))
1933年12月	27611-27612	筑前	新作 阿波の鳴門	山元旭錦	文推(1934年総目録(第2版))
1934年1月	27643-27644	筑前	南部坂雪の別れ	山元旭錦	
1934年2月	27683-27684	筑前	本能寺	山元旭錦	
1934年2月?	27720-27721	筑前	旗盤山の嵐	山元旭錦	加藤庄市作詞、1934年3月月報既発売参照
1934年3月	27728-27729	筑前	桂小五郎と幾松	山元旭錦	
1934年4月	27764-27765	筑前	月形半平太	山元旭錦	文推(1935年総目録)
1934年5月	27802-27803	錦心流	石童丸	福澤錦凌	
1934年8月	27955-27956	筑前	嗚呼東郷元帥	山元旭錦	松本紫水作、臨時発売

昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1934年12月	28099-28100	筑前	尊き一声（日本人は此処にゐる）	山元旭錦	松本紫水作
1935年3月	28236-28237	筑前	乃木將軍（植木坂の戦）	山元旭錦	文推（1936年総目録）
1935年4月	28259-28260	筑前	琉球の楠公 護佐丸	鹿倉旭霊	
1935年4月	28261	筑前	吾等の家は五大州	鹿倉旭霊	
1936年1月	28635-28638	錦心流	石童丸 = アル バム入 =	永田錦心	大正13年10月16日吹込、 「至宝レコード」として記載
1942年9月	100557-100558	主奏楽	あ、特別攻撃隊	琵琶：押田旭窈、 唄：竹内旭祥、 二絃琴：藤舎蘆月、 三味線：金子久子、 尺八：田中允山	邦楽協会推薦、高橋掬太郎作、 押田旭窈作曲

【表三】リーガルにおける近代琵琶楽レコード発売目録

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1933年	65116-65117	錦心流	西郷隆盛	榎本芝水	1933年総目録参照、文推 (1933年総目録)
1933年	65118	錦心流	菅公	大館錦棋	1933年総目録参照
1933年	65119-65120	錦心流	石童丸	大館錦棋	1933年総目録参照
1933年	65121-65122	錦心流	続石童丸	大館錦棋	1933年総目録参照
1933年	65123-65124	錦心流	肉弾三勇士	大館錦棋	大坪草二郎作、1933年総目録 参照
1933年	65125-65126	錦心流	本能寺	大館錦棋	1933年総目録参照
1933年	65127-65128	錦心流	本能寺	萩谷錦川	1933年総目録参照
1933年	65129-65130	筑前	白虎隊	高野旭方	1933年総目録参照
1933年	65131-65132	筑前	石童丸	高野旭方	1933年総目録参照、文推 (1933年総目録)
1933年	65133-65134	筑前	台湾入	高野旭方	1933年総目録参照
1933年	65135-65136	筑前	佐倉義民伝	高野旭方	1933年総目録参照
1933年	65137	筑前	大楠公（桜井の駅）	川原旭鳳	1933年総目録参照
1933年	65138-65139	筑前	常陸丸	川原旭鳳	1933年総目録参照
1933年	65140-65141	筑前	満蒙事変	益満旭錦	1933年総目録参照
1933年	65142-65143	筑前	古賀連隊長	益満旭錦	1933年総目録参照
1933年	65144-65145	筑前	肉弾三勇士	益満旭錦	1933年総目録参照
1933年7月まで	65785-65786	錦心流	川中島	大館錦棋	1935年総目録参照
1933年7月まで	65861-65862	筑前	橘中佐	豊田旭稜	1935年総目録参照
1933年7月まで	65900-65901	筑前	天理教祖伝 霊救	山元旭錦	1935年総目録参照
1933年7月まで	65906-65907	高峰	宇治川	高峰筑風	1935年総目録参照
1933年8月?	65949	筑前	乃木將軍	田中旭嶺	1933年9月月報既発売参照
1933年8月?	65999-66000	筑前	川中島	豊田旭稜	1933年9月月報既発売参照
1933年10-11月	66144-66145	錦心流	紅葉狩	大館錦棋	1933年12月月報既発売参照
1934年1-3月	66267-66268	錦心流	吹雪の敵	大館錦棋	1934年4月月報既発売参照
1934年5-12月	66380-66381	錦心流	桜狩	大館錦棋	1935年総目録参照
1934年5-12月	66416-66417	筑前	石童丸（前篇）	豊田旭稜	1935年総目録参照

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1934年9月	66544-66545	筑前	赤垣源蔵	田中旭嶺	
1935年1月	66721-66722	筑前	大高源吾	豊田旭稜	レコードタイムス1月号参照
1935年2月	66776-66777	講談	乃木将軍 (陣中の夢)	水也田呑洲	レコードタイムス2月号参照
1935年3月	66823-66824	筑前	石童丸	豊田旭稜	レコードタイムス3月号参照、 「石童丸(続)」(1935年5月月報既発売)
1935年4月	66878	筑前	井伊大老	高野旭嵐	レコードタイムス4月号参照
1935年5月	66930-66931	講談	大楠公	水也田呑洲	
1935年7月	67039-67040	薩摩	彰義隊	吉村岳城	池辺義象作詞、「会社推薦の優秀盤」(レコードタイムス7月号)
1935年8月	67100-67101	高峰	白虎隊	高峰筑風	
1935年9月	67171-67172	筑前	那須与市	高野旭嵐	
1935年10月	67222-67223	筑前	近藤勇	山元旭錦	
1935年11月	67316-67317	筑前	伊賀の曙	高野旭嵐	レコードタイムス11月号参照
1935年12月	67329-67330	筑前	大忠臣蔵	山元旭錦	山下由輝作、1936年総目録には「中篇」の記載あり
1936年1月	67384-67385	筑前	大忠臣蔵(前篇)	山元旭錦	
1936年1月	67386-67387	高峰	那須与市	高峰筑風	
1936年2月	67447-67448	筑前	小督	高野旭嵐	
1936年2月	67449-67450	薩摩	鉢の木	吉村岳城	
1936年3-7月?	67509-67510	筑前	大忠臣蔵(後篇)	山元旭錦	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67511-67512	錦心流	山科の別れ	福澤錦凌	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67620	筑前	橘中佐	山元旭錦	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67621	錦心流	本能寺	雨宮薫水	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67678-67679	筑前	広瀬中佐	山元旭錦	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67680	錦心流	桜井の駅	福澤錦凌	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67737-67738	筑前	高田の馬場	高野旭嵐	1936年8月月報既発売参照
1936年3-7月?	67739-67740	薩摩	光秀の最後	吉村岳城	1936年8月月報既発売参照
1936年8月	67798-67799	筑前	扇の的	山元旭錦	
1936年9月	67856-67857	筑前	安宅の関	高野旭嵐	
1936年9月	67858-67859	錦心流	別れの盃	福澤錦凌	
1936年10月?	67906-67907	筑前	石童丸	山元旭錦	1936年11月月報既発売参照
1936年11月	67962-67963	筑前	壇の浦	高野旭嵐	
1936年12月	67996-67997	筑前	赤垣源蔵	高野旭嵐	
1937年1月	68053-68054	筑前	義士の討入り	高野旭嵐、 琴：高野旭方	
1937年1月	68055-68056	筑前	伊賀の曙	山元旭錦	
1937年2月	68116-68117	筑前	坂本龍馬	山元旭錦	
1937年3月	68173	筑前	湖水渡り	山元旭錦	
1937年3月	68174-68175	錦心流	松の廊下	大館錦棋	
1937年4月	68228	筑前	常陸丸	山元旭錦	
1937年4月	68229	錦心流	河内の宿	福澤錦凌	
1937年5月	68289-68290	筑前	西郷隆盛	山元旭錦	
1937年6月	68347-68348	筑前	川中島	山元旭錦	
1937年7月	68404-68406	都	明智左馬之介 湖水渡り	高橋春錦	柿木寸鐵作詞・作曲、既発売目録には「錦心流琵琶」の項目に記載

昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1937年8月	68470-68471	筑前	高田の馬場	山元旭錦	
1937年8月	68472-68473	錦心流	石童丸	福澤錦凌	
1937年9月	68532-68533	筑前	霊馬の漣	山元旭錦	
1937年9月	68534-68535	都	吉田松陰	高橋春錦	柿木寸鐵作詞・作曲、「薩調改造特許都琵琶」
1937年10月	68582	都	西郷隆盛	高橋春錦	柿木寸鐵作詞・作曲、「薩調改造特許都琵琶」
1937年10月	68583-68584	筑前	林大佐	山元旭錦	山下良輝作詞
1937年11月	68650-68651	筑前	大高源吾	高野旭嵐	
1937年12月	68683-68684	筑前	南苑の華噺酒 井少佐	山元旭錦	高橋掬太郎作
1938年1月	68732-68733	都	支那軍覆滅の 歌	高橋春錦	柿木寸鐵作曲
1938年2月	68794-68795	筑前	渡洋爆撃行	村上旭蓮	海軍中佐梅崎卯之助作詞、田中旭嶺作曲
1938年3月	68835-68836	都	那須与市宗高	高橋春錦	柿木寸鐵作詞・作曲、「薩調改造特許都琵琶」
1938年4月	68876	筑前	関ヶ原	山元旭錦	
1938年5月	68928	錦心流	月下の陣一露 營の夢一	三輪枕水	
1938年5月	68929	筑前	吉野静	豊田旭稜	
1938年6-7月?	68970-68971	筑前	月形半平太	山元旭錦	1938年11月月報昭和13年1-10月新譜参照
1938年6-7月?	69025	筑前	大高源吾	山元旭錦	1938年11月月報昭和13年1-10月新譜参照
1938年8月	69078-69079	筑前	夜討曾我	豊田旭稜	
1938年9月	69135-69136	筑前	鉢の木	豊田旭稜	
1938年10月?	69183-69184	筑前	四條暁	豊田旭稜	1938年11月月報昭和13年1-10月新譜参照
1939年2月	69333-69334	筑前	赤垣源蔵	山元旭錦	
1939年4月	69453-69455	芝水流	脇坂部隊(南 京一番乗)	榎本芝水	中山正男原作、林じゅん脚色、榎本芝水作曲、「陸軍省推薦『脇坂部隊』所載」

【表四】ビクターにおける近代琵琶楽レコード発売目録

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1928年4月	50253	高峰	童謡双立歌/ 童謡螢の出盛り	東京交楽団員	高峰三楽奏
1928年4月	50255-50256	高峰	扇の的	唐澤筑瑞	
1928年4月	50265	錦心流	西郷隆盛	雨宮錦峰	
1928年5月	50316	筑前	壇の浦	田中旭嶺	五絃
1928年5月	50317	筑前	湖水渡	田中旭嶺	文推(1930年総目録、1933年には推薦マークなし)
1928年6月	50248	高峰	台湾入	唐澤筑瑞	
1928年6月	50327	筑前	橘中佐	田中旭嶺	
1928年7月	50194	錦心流	石童丸	永田錦心	旧吹込、曲種は「薩摩」
1928年7月	50195	錦心流	常陸丸	永田錦心	旧吹込、曲種は「薩摩」
1928年7月	50196	錦心流	城山	永田錦心	旧吹込、曲種は「薩摩」
1928年7月	50197	錦心流	本能寺	永田錦心	旧吹込、曲種は「薩摩」

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1928年8月	50409-50410	筑前	義士の本懐	田中旭嶺	
1928年9月	50532	筑前	橋弁慶	琵琶：田中旭嶺、 伴奏：ビクター音楽部	ピアノ伴奏
1928年9月	50533-50534	筑前	宇治川	琵琶：田中旭嶺、 伴奏：ビクター音楽部	ピアノ伴奏
1928年11月	50432-50433	錦心流	川中島	榎本芝水	
1928年11月	50457	筑前	小栗栖	田中旭嶺	五絃
1928年12月	50482	錦心流	雪晴れ	雨宮錦峰	
1929年2月	50579-50580	錦心流	城山	榎本芝水	
1929年3月	50655	筑前	菅公	秋根旭恵	
1929年3月	50670-50673	錦心流	石童丸	榎本芝水	
1929年4月	50674-50675	薩摩	旅順開城	吉村岳城	文推(1930年総目録)、「岳城流宗家」
1929年4月	50688	筑前	南部坂	岡野旭榮	
1929年5月	50712-50713	筑前	小督	金地旭園	
1929年6月	50736-50737	筑前	常陸丸	田中旭嶺	文推(1930年総目録)
1929年7月	50779-50780	錦心流	常陸丸	榎本芝水	
1929年8月	50806-50807	高峰	血染の雪	櫻井筑香	
1929年10月	50874-50875	錦心流	本能寺	榎本芝水	文推(1931年総目録)
1929年11月	50910	高峰	大石内蔵之助	櫻井筑香	
1929年12月	50947-50948	錦心流	台湾入り	榎本芝水	文推(1932年総目録)
1930年1月	50990-50991	筑前	台湾入り	田中旭嶺	
1930年1月	50992-50993	錦心流	橘大隊長	榎本芝水	1~4面
1930年2月	51046-51047	筑前	大高源吾	田中旭嶺	
1930年3月	51066-51067	筑前	四條暁	田中旭嶺	
1930年4月	51097-51098	錦心流	桜狩	榎本芝水	
1930年5月	51138-51139	筑前	乃木將軍	川原旭鳳	
1930年6月	51179-51180	筑前	靈馬「漣」	田中旭嶺	
1930年7月	51247-51248	錦	白虎隊	水藤錦稜	文推(1932年総目録)、「錦心流錦琵琶」
1930年8月	51284-51285	筑前	衣川	田中旭嶺	
1930年9月	51323-51324	錦心流	橘大隊長	榎本芝水	5~8面
1930年10月	51360-51361	錦	屋島の誉れ	水藤錦稜	「錦心流錦琵琶」
1930年11月	51412-51413	筑前	夜討曾我	田中旭嶺	文推(1932年総目録)
1930年12月	51484-51485	錦	敦盛	水藤錦稜	「錦心流錦琵琶」
1931年1月	51513-51514	筑前	乃木大将	田中旭嶺	
1931年2月	51538-51539	錦	吉野落ち	水藤錦稜	文推(1933年総目録)、「錦心流錦琵琶」
1931年3月	51575-51576	筑前	広瀬中佐	田中旭嶺	文推(1932年総目録)
1931年4月	51611-51612	筑前	坂本龍馬	川原旭鳳	
1931年5月	51681-51683	錦	本能寺	水藤錦稜	田中濤外作詞、「錦心流錦琵琶」
1931年6月	51696-51697	筑前	地震加藤	田中旭嶺	文推(1933年総目録)
1931年7月	51770-51771	錦	楠公	水藤錦稜	「錦心流錦琵琶」
1931年8月	51816-51817	高峰	高山彦三郎	高峰筑風	
1931年9月	51829-51830	筑前	高田の馬場	田中旭嶺	
1931年10月	51889-51890	錦	五條橋	水藤錦稜	「錦心流錦琵琶」
1931年11月	51782-51783	高峰	乃木將軍	高峰筑風	日本伝統文化振興財団調査報告書「1931年8月発売」

昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1931年12月	51974-51975	筑前	丸橋忠弥	田中旭嶺	
1932年1月	52033-52034	高峰	扇の的	高峰筑風	
1932年2月	52035-52036	錦	義士の討入	水藤錦稜	臨時発売新譜、「錦心流錦琵琶」、日本伝統文化振興財団調査報告書「1931年12月発売」、文推(1937年総目録)
1932年2月	52076-52077	筑前	坂本龍馬	田中旭嶺	文推(1933年総目録)
1932年3月	52110-52111	高峰	川中島	高峰筑風	
1932年4月	52142-52143	錦	雪の進軍	水藤錦稜	「錦心流錦琵琶」
1932年3月	52170-52171	筑前	北満嵐(噫経理部隊十六士)	豊田旭稜	3月発売追加新譜、白田少佐作詞、文推(1937年総目録)
1932年5月	52175-52176	筑前	鬼界ヶ島	田中旭嶺	
1932年6月	52237-52238	錦	古賀連隊長	水藤錦稜	
1932年6月	52250-52251	高峰	国の華—爆弾三勇士	高峰筑風	大坪草二郎作詞
1932年7月	52278-52279	高峰	湖水渡	高峰筑風	文推(1937年総目録)
1932年8月	52324-52325	筑前	扇の的	田中旭嶺	文推(1934年総目録)
1932年9月	52365-52366	錦	堅田の落照	水藤錦稜	
1932年10月	52396-52397	高峰	児島高德	高峰筑風	
1932年11月	52424-52425	筑前	本能寺	田中旭嶺	
1932年12月	52468-52469	高峰	小敦盛	高峰筑風	
1933年1月	52507-52508	錦	錦の御旗	水藤錦稜	
1933年2月	52540-52541	筑前	項羽	田中旭嶺	
1933年3月	52578-52579	高峰	本能寺	高峰筑風	
1933年4月	52606-52607	錦	曲垣平九郎	水藤錦稜	田中濤外作詞、水藤錦稜作曲
1933年5月	52632-52633	筑前	平野の最期	田中旭嶺	葛生桂雨作詞、二世橘旭翁作曲
1933年6月	52671-52672	高峰	台湾入	高峰筑風	
1933年7月	52702-52703	錦	石童丸	水藤錦稜	文推(1937年総目録)
1933年9月	52775-52776	筑前	白虎隊	田中旭嶺	文推(1937年総目録)
1933年10月	52803-52804	高峰	東郷元帥	高峰筑風	長井静泉作、高峰筑風作曲
1933年11月	52839-52840	筑前	紅葉狩	田中旭嶺、安部旭榮	神野三巴作詞、安部旭洲作曲
1933年12月	52871-52872	錦	大高源吾	水藤錦稜	
1934年1月	52907-52908	高峰	小楠公	高峰筑風	櫻井の別れ 上下、正行の最後 上下
1934年2月	52951-52952	高峰	常陸丸	高峰筑風	池辺義象作詞、文推(1937年総目録)
1934年3月	52979-52980	高峰	志士の鑑(沖禎介・横川省三の最期)	高峰筑風	
1934年5月	53043-53044	高峰	吉田松陰	高峰筑風	
1934年7月	53104-53105	高峰	護良親王	高峰筑風	高峰筑風作曲
1934年9月	53167-53168	高峰	建国の神	高峰筑風	長井静泉作詞、高峰筑風作曲
1934年11月	53236-53237	錦心流	噫、小野訓導	萩谷姪水	
1935年1月	53290-53291	高峰	白虎隊	高峰筑風	
1935年4月	53364-53365	高峰	血染の雪	高峰筑風	
1935年6月	53419-53420	錦心流	乃木将軍(最後の参内)	萩谷姪水	酒井幽泉作詞、萩谷姪水作曲
1935年8月	53500-53501	高峰	日蓮上人	高峰筑風	
1935年12月	53571-53572	高峰	南部坂	高峰筑風	高峰筑風作詞・作曲、文推(1937年総目録)

【表五】ジュニア・ビクター大衆盤・スター・Z盤における近代琵琶楽レコード発売目録

新譜年月	レコード番号	曲種	曲目	演奏者	備考
1933年3月	J10027	筑前	城山の西郷	荒牧旭弘	
1934年3月	J10145-J10146	筑前	湖水渡り	大坪旭邦	
1934年6月	J10171-J10172	筑前	大徳寺	大坪旭邦	
1934年7月	J10181-J10182	筑前	佐渡情話 のお玉	荒牧旭弘	河原杏子作詞、荒牧旭弘作曲
1935年8月	J10286	錦心流	西郷隆盛	雨宮錦峰	
1935年10月	J10308-J10309	筑前	空閑少佐	高野旭嵐	村瀬時男作詞、文推（1937年総目録）
1936年1月	J10340-J10341	筑前	伊賀の曙	高野旭嵐	文推（1937年総目録）
1936年5月	J10369-J10370	錦心流	船弁慶	雨宮薫水	
1936年7月	J10392-J10393	鶴鳴流	川中島	若松干城	南部露庵作詞、1～3面、詩吟《飛雨蕭々》も収録
1936年9月	J10406-J10407	錦心流	児島高德	雨宮薫水	
1937年7月	S1060	筑前	川中島	田中旭嶺	
1937年8月	S1034	筑前	常陸丸	田中旭嶺	
1937年10月？	S1097	筑前	龍の口	田中旭嶺	1937年11月月報既発売参照
1937年11月	S1125	筑前	義士の本懐	田中旭嶺	
1937年11月	S1148	筑前	空の訣別	押田旭窈	大澤逸足作詞、押田旭窈作曲、事変特集レコード、10月1日臨時発売
1938年1月	S1177	筑前	江戸の暁鐘	押田旭窈	大澤逸足作詞、二世橘旭翁作曲
1938年3月？	S1228	筑前	台湾入	田中旭嶺	1938年4月月報既発売参照
1938年4月	S1250	筑前	曾我の夜討	田中旭嶺	初代橘旭翁作曲
1938年5月	S1274	筑前	大楠公	田中旭嶺	飯田胡春作詞、橘旭翁作曲
1938年10月	Z-33	芝水流	城山の月一新 曲琵琶小品	榎本芝水	野村無名庵作詞、榎本芝水作曲
1938年12月	Z-78-Z-79	筑前	空の誉	豊田静芭	陸軍航空兵大佐白田寛三作詞、豊田静芭作曲
1939年3月	Z-99	芝水流	凱旋乃木	榎本芝水	野村無名庵作詞、榎本芝水作曲
1939年10月	Z-231-Z-232	芝水流	空軍の華一福 山航空兵大尉	榎本芝水	和田一之作詞、榎本芝水作曲
1940年1-2月	Z-273-Z-274	芝水流	少年航空兵	榎本芝水	日本伝統文化振興財団調査報告書参照

【表六】昭和5年1月～昭和14年11月に発売されたコロムビア邦楽レコード種目別一覧（上位40位）

順位	種 目	昭和5-6年 (1930-31)	昭和7-8年 (1932-33)	昭和9-10年 (1934-35)	昭和11-14年11月 (1936-39)	合計
1	流行歌	40	129	155	503	827
2	浪花節	157	173	85	124	539
3	子供もの	75	93	74	141	383
4	新民謡	72	84	135	40	331
5	端唄小唄	63	54	46	75	238
6	俚謡	67	94	48	23	232
7	ジャズソング	22	19	66	112	219
8	独唱	21	76	43	59	199

昭和戦前期にSPレコードで発売された近代琵琶楽

順位	種 目	昭和5-6年 (1930-31)	昭和7-8年 (1932-33)	昭和9-10年 (1934-35)	昭和11-14年11月 (1936-39)	合計
9	長唄	46	41	26	76	189
10	映画主題歌	68	42	27	51	188
11	軍歌・団歌・校歌・国民歌・応援歌	20	24	20	74	138
12	琵琶	48	46	21	2	117
13	箏・尺八	15	32	18	31	96
14	歌舞伎・演劇・喜劇	56	21	9	4	90
15	宝塚少女歌劇団	8	8	21	51	88
16	ヴァイオリン	3	10	24	42	79
17	松竹少女歌劇団	1	10	22	44	77
18	落語・漫談・漫劇	24	21	20	10	75
	ダンス音楽	—	18	24	33	75
19	義太夫	52	13	—	6	71
20	詩吟	3	8	17	34	62
21	舞踊小唄	—	—	—	55	55
	演説	6	16	4	29	55
22	清元	16	20	12	6	54
23	映画説明	42	3	—	8	53
24	器楽	16	—	2	34	52
25	オーケストラ	2	1	16	23	42 ^{*1}
26	ハーモニカ	4	5	8	26	43
27	雑	5	10	23	—	38
28	ブラスバンド	3	2	8	24	37
29	宗教・讃美歌	13	6	11	3	33
30	謡曲	8	8	10	4	30
31	運動競技	4	2	4	16	26
32	ギター・尺八	—	2	6	17	25
33	和洋合奏	7	9	2	5	23
34	合唱	2	7	4	9	22
35	ドラマ	—	13	5	2	20
36	ピアノ	1	—	4	14	19
	ギター	—	—	1	18	19
37	常磐津	15	—	—	3	18
	マンドリン	—	3	6	9	18
	スケッチ	6	4	—	8	18
38	満洲レコード	—	—	3	25	28 ^{*2}
39	映画劇	4	4	4	2	14
40	朗読	—	4	7	1	12

〈凡例〉

『日蓄（コロムビア）三十年史』（1940）を参照し、修正を加え筆者作表。

*1 「46」と記載されていたが、合計と異なっていたため修正した。

*2 満洲レコードの合計数から上位だと推測されるが、そのまま記載した。

Releases of Modern Biwa Music for 78 rpm Records in the Early Showa Period: An Analysis of Columbia and Victor

SOMURA Mizuki

Modern biwa music, including that of the satsumabiwa and chikuzenbiwa genres, was in vogue throughout Japan from the late Meiji period until the Taisho period. The prevalence of this music can be contextualized, not only in terms of the establishment of new biwa schools and the development of musical content, but also in terms of the influence of media such as record releases and radio broadcasting. This research aims to clarify how modern biwa music was enjoyed at the time, by focusing on 78 rpm records of modern biwa music released during the early Showa period, and by investigating the circumstances surrounding record sales. The sources covered in this survey are the monthly reports of new releases and the general catalogs of each record company, both of which are held in the archives of the National Diet Library. From these sources, information on the release of modern biwa music is comprehensively investigated and extracted. Recording collections with minimal missing issues by Columbia and Victor, as well as those of popular editions, have been selected for analysis.

In the cases of both Columbia and Victor, records of biwa music were sold almost every month after initial release. However, with the introduction of popular editions at the end of 1932, the releases of biwa music records shifted to those popular editions, and the number of releases gradually decreased. While there were numerous records newly recorded for popular editions, there were also occasions in which the contents of previously released records were re-released as popular editions. Regarding the genre of biwa music, many of the released songs have ornamented and brilliant vocal melodies, such as is found in the Chikuzenbiwa, Takaminebiwa and Kinshinryūbiwa genres.

Additionally, many records based on materials of contemporary events and situations were released during this period. In modern biwa music, contemporary themes, especially those concerning war, had been dealt with from the Meiji period, and this trend continued in the early Showa period. Some biwa players actively recorded such contemporary songs in order to increase their own musical activity. The record companies released contemporary pieces not only to heighten the war spirit, but also to improve business performance.

In conclusion, demand from listeners, production intentions of record companies, and active attitudes of biwa players, provided the context for the recordings of modern biwa music. Furthermore, with the aggravation of the war situation, various martial themes increasingly came to be actively addressed until the end of World War II.